

## フラスコの中の稀有な例

日野笙子

記憶が消えた日、それは春とは違った季節のようで、闇の箱がある小屋だった。ドアの絵柄に船の舵がついていた。微小で透明な蔦が壁に絡まっている。青年が、かなしみを消す「実験集」をひもといた。ドライアイスで泡立つ蒸留器、首のところが曲がったレトルトで、記憶が、一滴また一滴と研するフラスコのようなだった。浄化という言葉に疑問を持っていたから、失ってみて、人は何かを知るといふ、自分の感覚の根拠に気づくことは、いつだって青年の感じる器官への疑いをわかせていた。生息をはじめの前からある、グレーの空から降りる雫は、次々と繰り返し降るものだという思い込みを、彼も確かに重ねていた。

ぼくはある日ブラックボックスに落ちたのだ。自分の心など実験するわけにいかないから、心の死角の闇に彷徨うだけだ、と青年は思う。突然、空の果てが終わりを告げたときに、涙は出るのかもしれない。雨だれはいつかは止むことを知るのだろう。フラスコの立てる音を聞いた。水滴が分裂して連鎖反応を起こす。悔恨とルサンチマンにさえ不信の感官。それとは別の感官で、ぼくは生きている時間さえもうむなし。忘れる、忘れる、音を立てて、首の曲がったフラスコがささやく。かなしみを閉じ込めてはいけません。傷ついたガラスに触れる矛盾と対立を、実地で経験したように、かすかに声がふるえていた。

天気予報が流れる。気圧の変化で、縦縞が緩み、今夜、夜半まで曇もしくは雨に変わるでしょう。続いて最新ニュース。いつの季節のものだろう。廃墟の原野に放たれた動物たちの映像。たとえ放射能に汚れた動物であっても、いくつもの色のない季節を生き延びた再会に、人は激しく抱き寄せてしま

う。身元不明など人の心は許せない。生きて来たということ  
はそういうことだと、まるで閉じた魂に接続するサーモスタ  
ットののように、フラスコの中の声は言った。

忘れる、忘れる？ 毒牙にかかったフラスコの中の小さな  
生き物、その母親みたいに、声はうるたえ、もがいた。そし  
て言った。

あなたはかなしいのでしょうか、と。ぼくは病気で呆けた親  
を施設に送り届けるところです。まるで見当違いのことを青  
年は言う。次に泡立つ蒸留器に目をやり、再び「実験集」の  
中へ入っていった。一番愛した人は一番傷つけた人なのかも  
しれない。フラスコの中に小さな死骸。かなしいのはかなし  
みも伝わらないかなしみなのよ。泡が帰化してふっふつと忘  
れるように音を立て、熱して分離したら柔らかな涙になった。

雪が消えた日、外は快晴だった。しかしそんな晴れの日  
も光線はこの部屋には届かなかった。陽の光を遮るほどの茂  
みが辺り一帯に覆っていた。眩きが聞こえる。わたしが死な  
なくてもあなたはわたしを見つけてくれるの？ フラスコの  
中のものは、生きている人間のように、こうしてぼくをギョ  
ッとさせる。

一瞬花が咲いた蜜月の生き物たちに心労はない、と「実験  
集」に見つけた。濃いインク色の、鮮やかな青の、小さな花  
がフラスコの中に咲いた。あと幾年咲かせるのか、この花は。  
わたしが死ぬ前は一杯よ、と底抜けに笑った人との、平和で  
静かなその庭に似ていた。自由気ままに咲かせた木や花も今  
はない。あなたは不精者ね、とその花は笑った。フラスコを  
振ると、朝露のように、微笑して消えた。

そろそろ、命拾いの青年の話は終わる。次に生まれてくる  
ための季節は夏に向かうのだろう。窓辺は雫で一杯だ。フラ  
スコの中のインク色の花はいよいよ青い。